

地域包括ケアに向けたリハビリテーションの将来展望 —活動と参加につながるリハビリテーションをめざして—

座長 中根 博[†] 高木利栄子*第70回国立病院総合医学会
(平成28年11月12日 於 沖縄)

IRYO Vol. 72 No. 7 (311–312) 2018

要旨

近年、わが国における少子化、高齢化の進行は甚だしく、団塊の世代が75歳以上になる2025年に向けて、地域包括ケアシステムを構築することが急務とされている。このシステムの構築において、リハビリテーション部門が期待される役割を担うためには、介護予防や地域ケア会議といった場面に参画し、行政、医療、看護との連携を密にすること、地域リハビリテーションに携わる人材を育成することが重要となる。しかし、国立病院機構ではいまだ積極的に取り組めていないのが現状である。今回のシンポジウムでは指定発言者に国立長寿医療研究センターの近藤和泉先生をお招きし、地域包括ケアシステムの基本的概念とあるべき形をお話いただき、われわれの地域包括ケアシステムへの認識の整理と展望が確認できた。また、先駆的実践施設の3名のシンポジストの報告からシステムの現状と課題を共有し、参加者全員で、それぞれの職種や各施設の実情に応じた効果的な地域づくりの方策について、討論を行うことができた。

キーワード 連携, 地域包括ケア, リハビリテーション

はじめに

厚生労働省は、超高齢化社会を受け、2025年を目途に、高齢者の尊厳保持と自立生活支援の目的で、可能な限り住み慣れた地域で、自分らしい暮らしを人生の最期まで続けることができるよう、地域の包括的な支援・サービス提供体制（地域包括ケアシステム）の構築を推進している。現状では保険者であ

る地方自治体が主体となっているために、地域格差があり、その理念が全国的に均一に浸透しているとはいえない。また地域包括ケアシステムの担い手の一領域であるリハビリテーション部門の認識も十分とはいえず、国立病院機構病院のリハビリテーション部門は地域医療を模索している段階かと思われる。今回のシンポジウムでは国立病院機構病院のリハビリテーション部門の理学療法士・作業療法士・

国立病院機構福岡東医療センター 統括診療部長 *国立病院機構西別府病院 リハビリテーション科 †医師
著者連絡先：高木利栄子 国立病院機構西別府病院 リハビリテーション科 〒874-0840 大分県別府市大字鶴見4548番地
e-mail: takakirie@nishibeppu-hp.hosp.go.jp

(平成29年2月23日受付, 平成29年7月14日受理)

Symposium: The Future Prospects of Rehabilitation for the Integrated Community Care: How Can Rehabilitation Participate in the Integrated Community Care?

Hiroshi Nakane[†] and Rieko Takaki*, NHO Fukuoka Higashi Medical Center, *NHO Nishibeppu Hospital

(Received Feb. 23, 2017, Accepted Jul. 14, 2017)

Key Words: cooperation, integrated community care, rehabilitation

言語聴覚士が、今後、地域包括ケアシステムの構築を推進するため、その地域の実情に応じて、どのような取り組みを行っていくべきかを考える機会となった。

地域包括ケアシステムの基本的概念

今シンポジウムの指定発言者として、国立長寿医療研究センター 特命副院長 近藤和泉先生からは、地域包括ケアシステムの基本的概念とあるべき形としてご講演いただいた。

- 1) システムではなく、ネットワークであるということ。
- 2) 地域に暮らすすべての住民、あるいは組織が参加するということ。
- 3) 高齢者に限定されず、全世代、すべての人に適応されること。

『自助』を基本として、フォーマル・インフォーマルな『互助』の体制づくりが必要となってくる。

急性期病院の立場から

国立病院機構埼玉病院 理学療法士 廣田俊之氏から埼玉病院の365日リハビリテーションの取り組みと病棟療法士の配置、急性期病院の地域支援の現状と今後の展開をお話いただいた。

地域医療支援病院の取り組みと九州グループの現況

国立病院機構長崎川棚医療センター 作業療法士 山口みずほ氏からは、地域にある機構病院として、地域医療を支援する現状と、九州グループでの地域包括ケアへの取り組み状況の報告が行われた。

言語聴覚士による訪問リハの実際

社会福祉法人共愛会 戸畑共立病院 言語聴覚士 大森政美氏からは、急性期から生活維持期まですべてのフェーズでの言語聴覚士としての幅広いご経験から、現在の訪問リハビリテーションの取り組みの実際をご紹介いただいた。

ま と め

今回のシンポジウムに参加して、目から鱗が落ちたようにスッキリとした印象を持った参加者も多かったのではないだろうか。座長としても、地域包括ケアシステムはシステムではなく、ネットワークであるという言葉にはっとさせられた。国立病院機構病院のリハビリテーション部門の中では地域医療に関わる機会があっても、『地域包括ケアシステム』という言葉が先歩きして、実態のつかみづらい、もどかしさを感じていた。リハビリテーション職種は地域包括ケアシステムの担い手の一領域とされているが、そのネットワークの一員としての自覚が求められている。対象者の地域での生活を支援するために、地域のケアマネジャーが重要なのはいうまでもないが、そのケアマネジャーへ入院中の対象者の情報が詳細に伝えられ、病院から地域に戻ってもシームレスなリハビリテーションを受けられるように、リハビリテーション職種が積極的にコミュニケーション力を高めることも必要である。また、対象者の地域での生活をアセスメントするためにも、病院が所属している地域の資源の情報収集や啓発活動への参加が重要かと思われる。地域の支援者とともに『顔のみえる関係づくり』を行い、自らも地域の一員であることを認識し、個々の生活に即したりハビリテーションの提供はいうまでもなく、対象者のニーズに沿って、対象者自身で自己の選択が可能となるように援助できる職種として、今後も自己研鑽に努めていきたい。今回このシンポジウムを経験することで、改めて対象者へのリハビリテーションの提供のあり方を振り返る機会ともなった。指定発言の近藤先生をはじめ、各シンポジストの方々に感謝の意を表するとともに、今後のご活躍を祈念いたします。

〈本論文は第70回国立病院総合医学会シンポジウム「地域包括ケアに向けたリハビリテーションの将来展望 - 活動と参加につながるリハビリテーションをめざして -」として発表した内容を座長としてまとめたものである。〉

著者の利益相反：本論文発表内容に関連して申告なし。